

## 漁師のボーナス

中島八十一

三河渥美半島に椰子の實の流れ著くは太古より變らぬ風景なれど、そが詩を詠み曲付け碑建つるはいたく後のことなり。今は昔、徳川の御代にありては流れ著く椰子の實に詩情を覺ゆる者半島に無し。他所より來る芭蕉のみ鷹ひとつ見つけて嬉しと詠むばかりなりき。半島の半農半漁するより外に生くるよしなき田原藩領民にとりて流れ著く物とは大風に難破せる船をおきて他になし。今宵の大風も家吹き飛ばさるる憂ひより颱風一過のその後のことばかり氣になりてならぬ。部落のいづれも明日は舟を出すことのみ考へつつ今は嵐にちつと身を潜めたり。

夜の明くるも待ち切れず部落の若衆ひとり裏山に駆け上る。山といふとも火見櫓五つ六つ重ねたる程の山なり。頂きに至るや直ちに駆け下り西一里に難破船見ゆと部落中に行きわたる大聲にてのしる。小舟にてまっすぐ沖を目指せば黒潮の流れに乗りたる轉覆船と行合はむ。往時江戸に向かふ廻船の鳥羽を出れば伊豆松崎までの航路の中途に大船受け入るる良港あらず。船の進路失はぬやう岸を大きく離ることなく進めば低き山より視ること易し。

二人にて漕ぎ出だす小舟より見渡せば黒潮に浮かぶ積み荷直に見附くるを得たり。損なはれたる廻船も視野に入れど目もくれず。船に人あらば伊豆の小島に運良く流れ著くべからむ。浮かぶ積み荷の多ければ目にてより分く。こなたは小舟なり。積み荷のひとつ拾へばそれにて漕ぐ櫓は重し。嵐翌日の遠州灘には漁がためには舟は出さじ。舟出すは偏に積み荷にあり。それゆゑ積み荷の中身は見紛ふべからず。蜜柑は傷み易ければ數日の間、口にて楽しむに過ぎざれば拾ふに値せず。そを見分くるも年季なり。櫓しならせ濱に戻る間二人口を利かず、他の小舟と聲掛け合ふこともなし。濱に子等を連れ集まり來る女衆の聲のみ聞えて話の中身こそ聞えざらめ、何やら浮き立つ氣配傳はり來るは常のことなり。

夕方になりて二人の男連れ立ちて部落に現る。これも常のことなり。ひとりは二十歳代と思しき若き侍にて、田原藩舟奉行の手の者にて漁師に向ける顔に役人面を擱いて他に表情無し。今ひとりとは若くもあらぬ商人にて言の葉にはつかに上方の訛あり。顔はにこやかにはあれど親しみは持てぬ。若き役人は集まりたる漁師に向かひ、難破船あり、積み荷流れ著かばすべてを直ちに屯所に届くべしとばかり言ひ置きて立ち去りぬ。初老の商人部落の小屋の中覗き込み、拾ひ上ぐる積み荷改め、矢立取り出だし何やら大福帳に書き込み。明日人

足を呼べば勘定はその際にすれど、小粒十個にていかかと訊く。小粒ひとつに錢いづればかりになるや。漁師は日ごろここにて蹴躑く。即答せられぬを見たる内儀口を挟む。さらし木綿を十反おくれん。元は拾うて来るものに十反ぞ無理ならむ。お上にも同じばかりのものを収むべければ。

昨年は難破船を見ることなく時の過ぎたるに、今年は嵐の季節に来るや・さぶ(人名)、山より駆け下り叫びたり。部落より幾艘かの舟出でたるに、流るる荷一瞥したる一艘より大聲上がる。幕府の御用船とは積み荷の紋所より即座に知る。濱に上ぐるまで漁師はいとど寡黙になり、女衆もすぐにそれと察す。役人と商人のあらはるること變らねど、漁師はまづお上御用の積み荷と役人に告ぐ。ぢぢいの代には入会地の争ひにて双方に打ち首のなされたる思ひ出は未だ部落に色濃く残れり。ましてやこの場は葵の御紋なり。この段は役人に一事を預くるの外はなかるべし。さりとて商人は漁師にも僅かながらも取り分は渡したり。積み荷の江戸表に著くまでには田原藩の掛かりあればこそ田原藩にも取り分あらめ。商人はこれまでの慣行に従ひて肅々と勘定す。

(令和七年六月十二日受附)